

生物多様性の保全



マテリアリティの2019年度目標と実績

○：計画通り △：遅れあり

主な取り組み内容	2019年度目標	指標	2019年度実績	自己評価
国内拠点の生物調査・ 生物多様性保全活動範囲の拡大	<ul style="list-style-type: none"> ・京都工場での生物調査の実施 ・パジェロの森(山梨県)での植林・育林活動の実施 ・フィリピンでの植林活動の実施 	各取り組み項目 の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・京都工場で生物調査を実施 ・年2回の活動を実施 ・フィリピンでの植林活動を計画 	○

基本的な考え方

すべての生きものは様々な関係で複雑につながり合い、バランスを取りながら生きています。私たち人類の生活は、この生物多様性による恩恵を受けています。

三菱自動車は、工場建設をはじめとする土地利用や、工場からの化学物質の排出、製品の使用や事業活動によって排出される温室効果ガスなどにより、生物多様性に直接的または間接的に影響を与えています。生物多様性による恩恵を持続的に受けられるよう守っていくことが、当社の重要な課題と考えています。

当社は、2010年8月に「三菱自動車グループ生物多様性保全基本方針」を策定し、保全活動を推進しています。

当社の国内事業所で、自然環境保全法および都道府県条例にもとづく保護地域の内部や隣接地域にあるものではありませんが、事業活動が生物多様性に与える影響を把握するため、順次、生態系調査を行っています。

また、首都圏の水源を守る、また社員の環境意識を醸成することを目的に、公益財団法人オイスカと協働し、山梨県早川町において、森林保全や社員ボランティア活動を通じた

地域との交流に取り組んでいます。

さらに、海外の関係会社でも保全活動を推進しています。

三菱自動車グループ 生物多様性保全基本方針

人類の活動が生物多様性の恩恵を受けているとともに、生物多様性に影響を及ぼしているとの認識を持ち、三菱自動車グループ企業全体で、地球温暖化防止、環境汚染防止、リサイクル・省資源の取り組みに加え、生物多様性に配慮した活動に取り組み、生物多様性への影響の把握と低減に継続的に努めます。

1. 事業活動での配慮

省エネルギー、廃棄物の発生抑制、化学物質排出抑制などを推進するとともに、工場建設などの土地利用においては周辺地域に配慮し生物多様性への影響の把握と低減に努めます。

2. 製品での配慮

燃費改善、排出ガス対策、リサイクル設計を推進し、環境に配慮した材料の採用に努めます。

3. 理解・啓発・自覚の継続

三菱自動車の活動と生物多様性の関係についての理解と自覚を、経営層から従業員まで全員で共有します。

4. 社会との協働・連携

サプライチェーンおよび株主、自治体、地域社会、NPO/NGOなどのステークホルダーと連携し、活動を推進します。

5. 情報の発信・公表

三菱自動車の活動内容や成果について、お客様や地域社会への情報発信・公表に努めます。

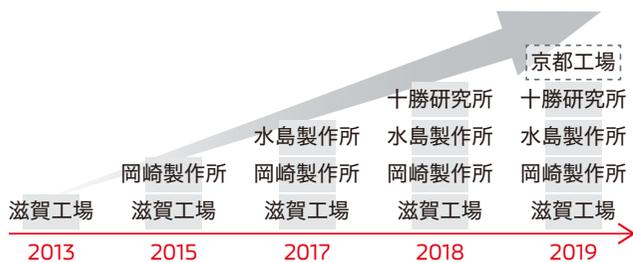


国内事業所における生態系調査

クルマの生産には大規模な工場を必要とします。三菱自動車の事業における土地利用が地域の生態系に与える影響を把握することは、生物多様性保全に取り組むうえで重要と考えます。

この考えのもと、当社は生物多様性関連のコンサルティング会社の支援を受け、工場など大規模な土地を利用する国内事業所での生態系調査を進めています。調査では、国内事業所の敷地内のみならず、周辺環境の生態系を実地調査や文献調査から把握することで、地域の生物多様性と調和した保全施策につなげています。

これまでの取り組み拠点



TOPICS

京都工場の生態系調査

京都工場は、京都府京都市の都市部にあり、周囲に多くの家や工場があります。一見、生きものが暮らす環境としては厳しいように思われますが、京都工場における土地利用が生物多様性に与える影響を把握し、生物多様性保全に向けた取り組みを行うことを目的に、2019年4月から10月までいきもの調査を実施しました。

調査の結果、京都工場において、367種もの動植物の生息が確認されました。希少種や緊急性の高い外来種などは確認されませんでした。ウマノアシガタやシラスゲなど、主に里地に生育し、都市部では珍しい植物が見つかりました。当該地域にかつて広がっていた里山環境の名残りであると考えられます。

京都工場は1944年以前から前身の工場があり、その当時の製作所周辺はまだ水田などの里地環境が広がっていました。その後、京都工場の周辺は都市化し、里地の植物の生育環境は失われていきますが、構内は当該地域が都市化する以前から現在に至るまで緑地が残り、定期的に草刈りなどの管理が行われてきたため、里地の植物が構内の敷地に入り込んだ後、現在まで生育し続けられたと考えられます。

したがって、京都工場は当該地域にかつて見られた植物が局所的に生き残っている場所（レフュージア）になっていると考えられ、地域の生物多様性を保全するうえで重要な環境であると言えます。

京都工場では、これまで京都文化に根ざした在来種であるフタバアオイを構内で育成するなど、地域と連携した生物多様性保全を進めてきました。さらに今後は、今回の調査で確認された京都工場と周辺の自然環境とのつながりを大切にし、生物多様性保全を意識した構内緑地の維持管理を行うことで、地域の生態系保全に努めていきます。

【調査で確認された、都市部では珍しい植物】



ウマノアシガタ



シラスゲ



海外における保全活動

三菱・モーターズ・フィリピンズ・コーポレーション (MMPC) とフィリピンの環境天然資源省 (DENR) は、持続可能な統合地域開発 (SIAD) の計画に沿って、2018年3月より共同で植林プロジェクトを開始しました。今回のプロジェクトは、特に、気候変動の影響を受けやすい貧困層や社会から取り残された地域社会に不可欠な持続可能な開発を実現することを目的としています。

約5年間で、ルソン島において、累計100haの植樹を行う計画です。

2019年度は、本プロジェクトの第二段階として、ラグーナ州30haにおける土地の造成や植樹、農園保護などの活動を実施するという覚書をDENRとの間に締結しました。



覚書への署名の様子